

髪カミの環ワタリ

田久保英士



髪
の
環

講
談
社

田
久
保
英
夫

髪の環

昭和五十一年七月十六日 第一刷発行
昭和五十一年十一月十六日 第二刷発行

著者 田久保英夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二二

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五一一二(大代表)

振替 東京八三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社



定価は函に表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取りかえします。

©田久保英夫 昭和五十一年

髪
の
環
目
次

河
明
り

129

夢
の
谷

95

蜜
の
味

69

月
か
げ

37

髪
の
環

7

朝の通り

157

夏野

185

羽搏ぎ

211

雫

241

あとがき

265

装幀 永井一正

田久保英夫作品集

髪の環

髪 の 環

その部屋には、鍵がかかっていなかった。

私が古びた真鍮のノブをまわすと、寄木の扉が蝶番を軋ませて開き、ひっそりと湿った空気が鼻にきた。草の青臭いにおいを含んだ湿気は、春の雑草が猛々しく繁茂するこの屋敷の崖ぎわから、まるで留守を狙うように屋内へしのびこんでくる。

狭い沓脱ぎの白タイルの上に、踵が履きつぶれた臍脂のロウ・ヒールがころがっている。私がひと足廊下へあがると、壁のかけ釘に、一三個鍵を束ねた小さな輪が肩にふれた。いつもは鍵を必ずかけて出るのに、そんな束ごと抛ってあるのは少しどうかしている。

私は部屋へ入りながら、誰もいないのに、自分が弱い草食獣のように用心深くなってい

るのを意識した。八畳の洋間で、庭へむけて三方ガラスの出窓がつき、以前の住人からの厚いドオ布織のカーテンが垂れている。その隙間から洩れる光のなかに、卓袱台と座机が浮んでみえる。部屋につくりつけの洋筆筒と戸棚のほか、家具といえればこれきりだ。私はそこに坐ろうとして、間近な壁にさがった薄緑色の服から、日向の藺草いぐさのような若い女の体臭を嗅いだ。運動着らしい白ブラウスと、黒いブルーマも吊り下っている。ブラウスの端には「皆子」と墨で名が入っている。

私は湿っぽい畳に腰を下すと、所在ないまま、もっと意地悪い眼であたりを見まわした。実際、皆子が短大の寮を出る時は、舎監の女先生に、私は「保護者」の欄へ印を押させられたのだから、つとめてそんな役割に立ちかえる。それは肉親と似た感覚もどこかでする。

そうした眼で見ると、この部屋はいかにも貧相だ。座机の上には、小型の英語とドイツ語の辞書のほか、「電気治療法の実験」とか看護学講座「外科」「皮膚科」「眼科」といった教科書らしい本が並んでいるきりで、しかも不勉強の証拠に、辞典などは少しも汚れてない。またその上には、真新しい籐で編んだ蠅タタキが、ぼつんと置かれている。何より机の端に、不相応に大きな青磁色の花瓶があって、そこに長い孔雀の羽根が十本あまり挿

しこんであるのが眼につく。

ところが、そんな羽根の類いは、柱の状差しや窓への換気孔や電気の笠などに、何の鳥か白く柔かいもの、灰紺色の扇のようなもの、朱い尾羽根のようなもの、と幾つも挿してある。女臭い人形とか花など何もない癖に、壁には同じ絵の部分なのか、桃色の肌の裸女が棘の生えた卵に乗ったり、大きな魚の尾を食べたりしている原色刷が、二枚貼ってある。私は自分がこの下宿をさがしてやったのに、ここへ入るのはまだ三度目だが、一人きりでこの彩りや光を眺めると、何となく気持が悪い。

それは保護者という曖昧な立場など、あっさり崩してしまいそうで、私はまた立ち上って、流し場へ行った。その棚のコップで、冷たい水をいっぱい汲んで、喉へ流しこむと、すぐ正面にこれだけはりっぱな、紫檀の浮彫り^{レリッ}で縁飾りした鏡が眼に入った。私はそれに見憶えがあった。確か皆子の死んだ母親のものだ。あるいは私の父が買ってやったものかも知れない。すると、私は父自身、老いてから「罪深い」と言った、その肉づきいい下腹を思い出し、自分がここにいるのも、その罪のせいかも知れないという気がした。

庭で犬が吠えた。部屋の窓へ行き、カーテンを掻きわけみると、屋敷の主が飼っている黒犬が、雑草を跳ぶように掠めて、走りすぎた。その雑種の黒犬は小さな魔物のよう

に吠え、走る。走って行った先は、母屋の洋館の勝手口で、そこで立話している家主の瘦せた主婦の腕にとびかかった。主婦の躰が二三歩動いたので、話し相手のすがたが見えた。皆子だった。

皆子は肩までの髪の毛を、ゆさゆさ揺すり、ただゆっくりと合槌を打っていた。一瞬、私はその躰全体にひどく変った印象をうけたが、咄嗟に何のせいかわからなかった。皆子は淡い葡萄色のＴシャツに、白い襷のあるスカートをはき、片掌に小型のバッグを持って、無意識に手を小さく振っている。私は犬がすぐその腕に跳びかかったので、はっとしたが、皆子は驚きもせず、掌で犬の頸を撫でている。私は皆子がそうして屋敷の女主人お嬢と話したり、犬がなついたりするのを初めて見た。皆子は他人とつき合いくいと思っていたが、いつ懇意になったのだろう。

しかし、主婦が貧血質の鈍い動作で勝手口へ入ってしまうと、皆子はふとこっちへ眼をむけた。私は窓から覗いているのを見られなくなかったが、隠れる暇もなく、皆子の肩が寄せられ、つよい眼つきで睨んだ。

「好かん。黙って部屋へあがって。」

小さな呟きにた声だが、私の耳に微かに届いた。と思うと、皆子は急にこっちを無視

するように、蹲んで、黒犬を膝へひきよせた。腕の柔かい裏側の皮膚へ、犬が前足をかけ、赤い舌で舐めるので、痛そうに唇をよじっている。しだいに顔に血の色がのぼり、はげしく首を振ると、肩先まで垂れた髪が光るように翻った。

その途端、私は皆子にさっきから、ひどく変った印象をうけたのは、髪の長さのせいだと気づいた。いや、長さが急に変わる筈もないが、綺麗に人の手が入り、ゆったり波打って、頭髮全体が伸びたように見える。私はそれに気づいた瞬間、自分でも不思議なつよい安堵——というより軀の芯に震えに似た感覚に襲われた。私は三ヵ月まえ女子寮で、今よりもっと硬い顔で蹲っていた皆子の髪に、手をやった時の感触を思い起した。その右耳の上の、短い毛髪は乱暴に切られて不揃いで、尖端がちくちく手のひらを刺した。

そうして私が窓から隙見していると、不意に皆子は、まだ見てるの、というようなつよい仕草で顔をあげた。私がカーテンをひいて、そこを離れると、庭の草むらを野分のように女と犬が走り廻る蹀音が聞えた。

その女子寮の管理人室で、私はずいぶん長く皆子を待たされた。玄関のスノコ敷きの広

い土間と、管理人の私室にはさまれた事務室で、誰もいない部屋の床も、椅子の背凭れも、雨の湿気をじっとり吸っていた。

私は最初、ひさしぶりに会う皆子に、かなり好奇心を覚えて、もう何年になるか、などと数えたりしていたが、一時間近くたってもし監が戻ってこない、少しいら立ってきいた。考えてみると、皆子が中学一年の頃から会ってないが、その間ずっと芦屋へ嫁に行っていた私の姉が面倒みていたので、こんな父兄がわりの仕事は姉の役目の筈だ。

姉は娘の頃、父の営む衣料問屋で働いていた皆子の母親に可愛がられ、大変なついていた。父がこの若い子持ちの女に興味をもち、別に家をもたせたから、母との間が二年間もごたごたした。そんな負担のせい、皆子の母親は持病の胆嚢が悪くなり、養生に京都郊外の生家へ帰ったので、一応家の中も収めたが、姉はその頃から父を「悪人」と呼び、皆子たちにいっそう肩入れした。

私に言わせれば、姉はいつも富裕な家庭に恵まれて、娘時代の幻を捨てない世話焼きだった。皆子の母親がいったんよくなったものの、急に激しい黄疸を起して、医者から見放された時も、婚家からときどき西京の病院へ見舞った。皆子一人のこされて、老祖母の也从から中学へ通うと、学費や生活費の大半をおくった。